



## 研究調査報告

2019年8月1～4日「戦時下日本の大衆メディア研究」

# 国策紙芝居—北海道函館調査・札幌での研究会記録

大串 潤児

(非文字資料研究センター 客員研究員)

## I. 遺愛幼稚園—函館の街

今年(2019年)、8月初めの函館は例年になく暑かった。「高級な夏」(本多勝一『北海道探検記』)もどこへやら、といった陽気だった。函館港を見おろす旧市街の高台、美しい港町風景をのぞめる「八幡坂」をのぼりつめ、カトリック元町教会・函館ハリストス正教会の近くに遺愛幼稚園はある。遺愛女学校(1874年開校)の附属幼稚園として1895(明治28)年に開園した、遺愛学院が経営する私立の幼稚園である。現在も使われている薄桃色にぬられた瀟洒な木造建物は、地域の篤志家の寄付などにより1913(大正2)年に建設されたものだ(函館市指定伝統的建造物)。通っていた子どもたちは市内中流以上の子どもたちであったという\*1。非文字資料研究センター「戦時下日本の大衆メディア研究」グループ(通称「紙芝居」班)、今回の北海道調査の目的の1つは遺愛幼稚園が所蔵する紙芝居史料群の実物確認と撮影であった。

北海道教育大学函館校の坂本紀子さんと合流。彼女には、今回の調査にあたって、遺愛幼稚園との折衝、調査の下準備、打合せなどご協力いただいた。遺愛学院長・福島基輝さんにご挨拶の後、さっそく建物2階資料室にある紙芝居調査にかかった。資料室の史資料群はすでに幼児教育論が専門の永井理恵さんが整理され、遺愛幼稚園所蔵資料目録もふくめて永井『近代日本キリスト教主義幼稚園の保育と園舎—遺愛幼稚園における幼児教育の展開』学文社、2011年として公刊されている。永井さんの整理によれば、遺愛幼稚園資料室所蔵史料はおおむね以下のグループに分けられる。第1に「大正期以降の遺愛幼稚園の運営状況と、日々の保育実践の様子を伝える幼稚園史料」。ここには日誌・記録文書類、保育用の玩具、絵本・レコード・紙芝居などが含まれる。第2に、明治期以降からの各種の書物・雑誌や音楽譜面などの史料。第3に遺愛幼稚園について記録してある外部資料。ここにはアメリカメソジスト婦人伝道協会や日本幼稚園協会の各年報など継続的に遺愛幼稚園の様



写真1 遺愛幼稚園2階の資料室。写真左手下の書棚に紙芝居は収蔵されている。



写真2 撮影した主な紙芝居。「大東亜を支ふる者」は北海道での刊行、「動く紙芝居」。

子を報告した文献もふくまれる\*2。

私たちの研究グループも早くから北海道の研究状況には注目していたが、永井さんの著作により史資料群の概要を的確に把握することができた。作業は『国策紙芝居からみる日本の戦争』収録の目録(「付録2 戦時下北海道内紙芝居データ」、461頁)と照合、同書が指摘する「初出の戦時下紙芝居」32点、うち遺愛幼稚園所蔵8点を確認、さらに永井・前掲書目録掲載紙芝居87点のうち戦時下紙芝居(出版年不明のものを確認のうえ)と照合して新規のもの、また戦前・戦後のものもふくめ24点の作品を撮影した。遺愛幼稚園には今井よね作品の所蔵もあった。また堅い紙に貼り付けて活用されたとと思われる薄紙の「決戦体制版」も含まれており、戦争末期の幼児教育の様子がしのばれる。すでに目録上では把

握していた作品であったが、現物を確認、複写（撮影）することが出来、研究素材の豊富化にはとても大きな意義ある調査であった。

戦時紙芝居が幼稚園や農繁期託児所などの保育教育・事業と密接に関連していたことはいうまでもないが、戦時下の地域キリスト教関係の保育教育・事業の特徴から紙芝居実践の意義を分析するというアプローチはまだまだ残された課題である。今回も函館地域やひろく北海道における戦時期キリスト教社会史についてはまったく検討することが出来ていない<sup>\*3</sup>。また函館市立中央図書館が所蔵する子どもの文化関係史料とも関連させて、函館地域の児童文化史を検討することもほとんど出来なかった<sup>\*4</sup>。函館は後述する北海道における生活綴方運動の1つの拠点であり、その意味でさらなる地域史的検討が深められるべき地域である。

調査にご協力いただいた遺愛学院長・福島基輝さんおよび遺愛幼稚園教職員のみなさまに記して感謝したい。

## II. なぜ、北海道か？——小樽の街で

「紙芝居班」では研究の当初から北海道について注目をしてきた。それは、紙芝居研究の方法として「本土」「内地」のみならず、植民地をも視野に入れて、地域社会における紙芝居活動（実演現場）の具体相を明らかにする」という視角を意識していたからであり、北海道は、綴方運動をふくめた紙芝居運動の盛んな地域で、かつ「内国植民地」として位置づけられ、「アイヌと紙芝居」や「サハリン（樺太）における紙芝居」といった問題領域にも関連する、いわばいくつかの光源から発せられる視線を交錯させ、問題を複合的に検討することが期待される地域であったからである。また、すでに北海道立文学館での企画展や各地域博物館での展示、永井・前掲書のような研究業績、そしてなによりも紙芝居のみならず児童文学・出版史については谷暎子さんの先駆的かつ体系的な仕事が存在していたからである<sup>\*5</sup>。

2019年夏に実施された北海道調査の主要な“ねらい”は次のようなものであった。

第1に、遺愛幼稚園所蔵の作品群を確認・撮影すること。北海道のなかでは比較的まとまった史料群である遺愛幼稚園のものを収集し、同時に函館地域の状況を確認することである。第2に、『国策紙芝居からみる日本の戦争』出版という「成果」をうけて北海道在住の研究者と研究会を実施し、今後の課題の確認や紙芝居研究に関する問題把握の方法的論議を行うこと、また研究状況

についての情報交換を行うことである。ここには北海道教育史研究・子どもの文化史研究の現状をどのように把握するか、という問題も含まれている。そして、第3に、可能であればアイヌ史研究の成果にも学びながら、北海道における紙芝居作品の物語構造論・表象論、実践運動の具体相などの特徴を確認すること、であった。すでに谷暎子さんのまとめによって道内各地域に所蔵されている紙芝居の存在状況は比較的明らかとなっていたが、広い道内に散在する史料を悉皆的に収集することは時間的・資金的余裕がなかったため、今回は函館（遺愛幼稚園）および札幌（北海道立文学館・北海道博物館）に焦点を絞り、可能なかぎり地域研究者との対話の時間を設定する行程を組んだ<sup>\*6</sup>。

さて、函館での調査を終え、札幌までは長旅となる。夏の羊蹄山は美しかった。2017年新年、倶知安町・京極町を調査した折は雪のなかの山のすがたであった。午後には小樽に到着。小樽は、金融機関が集中する商業と金融の街＝「北のウォール街」、そして「運河」と鯉漁・海運がさかんな港街、そして何よりも「プロレタリアートの街」である。小樽では2018年に小樽市総合博物館・運河館トピック展として「紙芝居と戦争」展が開催されている（4月7日～6月28日）。同展パンフレットによれば、展示された紙芝居作品は北海道立文学館所蔵のものと「当館所蔵の作品」とあるので、小樽市総合博物館も紙芝居を所蔵していることがわかる。残念ながら、今回は時間の都合上、確認することは出来なかった。他日を期したい。

小樽における紙芝居に関連する動きは、街頭紙芝居もふくめてすでにいくつかの事例が確認されている。例えば、札幌で日本教育活動画劇協会を設立、遺愛幼稚園のコレクションにも含まれていた「動く紙芝居」で特許を取得したという図案家の松田繁美（『北海タイムス』1939年10月21日）は、「小樽でおなじみの紙芝居の小父さん」と呼ばれていた（『小樽新聞』1942年4月20日）。また、より重要な論点としてはプロレタリア文化運動と紙芝居との相互関係という問題がある。いずれにしてもまだ小樽については私たちの共同研究でもまとまった検討はなされていない。

今回の調査では、市立小樽文学館で開催されている「いま、プロレタリア芸術がおもしろい——知られざる昭和の大衆文化運動」展を見ることが大きな目的であった（2019年7月6日～8月18日開催）。同特別展は、市立小樽文学館所蔵「池田壽夫コレクション」を基礎に

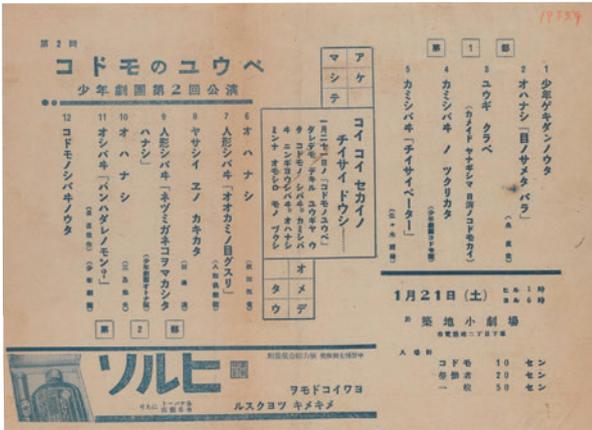


写真3 『昭和戦前期プロレタリア文化運動資料集 DVD版』（丸善雄松堂）より。所蔵は法政大学大原社会問題研究所、本文中にある市立小樽文学館企画展の展示資料。プロレタリア文化運動における紙芝居の事例。

文学のみならず演劇・映画・子どもの文化にまで視野をおよぼした優れた展示であった。何よりも1点1点の史料そのものに迫力があり、展示のコンセプト「『表現されたもの』それ自体の面白さ」を感じてもらおうこと、という意図は十分に実現されていたと思う。「それ自体面白い」ということは、言い換えれば20世紀—1920年代の思潮、特に「自然生長」性という議論にかかわる（札幌の炭火焼き屋「ウタリ」ではそのような議論に花が咲いた）。実際の作品のもつ強烈なイデオロギー性（目的意識性）と表現されてしまったもの「それ自体の面白さ」という論点である。地域（小樽）という設定をより彫の深いものとし、プロレタリア文化の「受容基盤」とは何か、という問題を考える時、「それ自体面白い」という論点はアクチュアルなテーマとなるだろう。これは紙芝居「受容」の問題でもある\*7。

プロレタリア文化運動と紙芝居というテーマについては、やはり松永健哉の思想と行動をまとめて論じるといふ仕事が本共同研究にも残されてはいる。が、松永のセツルメント経験といった民衆との「接面」の実際性・直接性という領域に加え、映画、なかでもアニメーションの普及性に早くから注目していたプロレタリア文化運動がどのような論理で紙芝居と向き合っていたのかはまた別途考えられるべき重要なテーマだろう。

実際、展示にはプロレタリア文化運動のなかでも紙芝居に大きな関心が寄せられていたことを示す史料もあった。「少年劇団第2回公演 第2回コドモノユウベ」では「カムシバキ「チイサイペーター」」、少年劇団コドモ隊「カムシバキ ノ ツクリカタ」がプログラムされていた（同、チラシ）。

### Ⅲ. 深まり、広がる「対話」

#### ——北海道立文学館における研究会

##### 1) 野幌の森で

北海道調査3日めは札幌で過ごした。午前中はリニューアルとなった北海道博物館を訪ね、展示の見学、同館の小川正人さんにご挨拶が出来、研究情報を提供していただいた。すでに前掲・拙稿で報告したように北海道博物館に紙芝居はわずかしかが所蔵されていない。今回は周辺史料としてリーフレット「紙芝居のおすゝめ」（北海道文化高揚会）を紹介され、後日、研究グループで共有することができた\*8。小川さんはじめ北海道博物館職員の皆さんのご厚意に感謝したい。

北海道文化高揚会は札幌市にあり、大日本産業報国会札幌地方鉾山部会指導、大政翼賛会推薦の団体とある。「紙芝居のおすゝめ」記載の「趣意書」において、紙芝居を「まがふ方なき日本文化の嫡出児である。日本の土地に種を下し、日本の精神を承け継いで育つた純然たる日本のもの」と位置づけ、一時「紙芝居界は左翼の巣窟なりと一部から評せられたけれども、「如何なる藝術様式にも勝る切実な教化的宣伝効果を與へる事……文学・絵画・音楽・工藝等の総合たるこの大衆文化を独自の藝術様式にまで高めることは、これが日本独自のものであるだけにその創造的意義は極めて大であり、皇国日本が世界に誇るに足る文化財である」と主張している。組織としては製作部・実演部・研究部を持っていたようである。そして「何時でも何処でも誰でも出来る文化の挺身隊」と銘打ったこのパンフレットでは「全隣組に翼賛隣組小劇場を！」として紙芝居活動が奨励され、実演の手引きの記載もあり、脚本募集も行っている\*9。北海道における紙芝居運動団体・組織については相当程度解明されているが、北海道文化高揚会は、紙芝居運動における産業報国運動・大政翼賛会系列の組織としては今回初めて明らかになったものである。

さらに小川さんからは『石附忠平寄贈資料目録』北海道開拓記念館、1975年3月の提供もうけた。今回、この資料群は見る事が出来なかったが、北海道の教育紙芝居運動のみならず広く教育界に大きな役割を果たした石附忠平を考える有力な素材であることは間違いない。後述する研究会でも話題になったが、北海道教育紙芝居作品—とくにアイヌの民話などいくつかの「もとねた」は『北海道小学郷土読本』（1931年、尋常小学校用12冊・高等小学校用4冊）などの郷土読本から取られているのではないかと、という問題があり、今後の作品分析

の参照軸として重要である。

また、釧路のアイヌ「吉良平次郎」を扱った「責任」などアイヌの人物や物語を扱った紙芝居はいくつか確認されているが<sup>\*10</sup>、アイヌ史研究のなかで戦時期がどのような研究状況となっているのか、また紙芝居（あるいはその前提となる「物語」などの構成）研究はどうか、など、引き続いての研究対話が求められる。

## 2) 研究会の記録

北海道博物館見学の後には北海道立文学館で調査と研究会を行った。道立文学館では2013年開催の特別展「紙芝居の今昔」以降も継続的に紙芝居を収集していて、2017年、筆者が調査した後も新しく所蔵された作品があり、それらを中心に撮影を行った。また、今回の道立文学館調査のもう1つの大きな目的は、同館が所蔵している北海道綴方教育連盟が刊行していた『同人通信』を閲覧・調査することであった（閲覧は原本の破損がひどいため複製のみ）。『同人通信』には北海道教育紙芝居研究会の動向や実践記録に関連する記事が掲載されている。すでに多くの研究で活用されているものだが、紙芝居運動の最末端や地域での「反応」がわかって本研究グループでも独自の分析を必要とする史料だろう。『同人通信』の読解をふまえた北海道紙芝居運動の分析については他日を期したい<sup>\*11</sup>。

午後は北海道における紙芝居をめぐる研究状況を確認し、今後の課題を模索するため研究会を実施した。谷咲子さんも参加され、活発な意見交換が行われた。報告は以下の通り。

大串潤児「北海道における紙芝居研究の成果と課題  
——問題提起として」

坂本紀子（北海道教育大学函館校）「北海道の「教育紙芝居」」

坂本さんの報告内容は本 News-Letter に別掲されるので、ここでは筆者の報告についてその構成のみ以下に記録しておこう。

はじめに

- 1 北海道における教育紙芝居運動—前史
  - 1) 行政による着目と活用
  - 2) 自作紙芝居運動の展開
  - 3) 北海道の街頭紙芝居
- 2 北海道教育紙芝居研究会（1940.5.11 発足）の活動



写真4 北海道綴方教育連盟「同人通信」（複製版）。同人たちの紙芝居実践報告も記載されている。北海道立文学館所蔵。

- 1) 性格と組織
  - 2) 活動
  - 3 北海道綴方教育聯盟事件 1940.11 ~ 1941.5
  - 4 1941年「北海道綴方教育聯盟事件」以後の北海道紙芝居運動
    - 1) 札幌教育紙芝居研究会
    - 2) 教育紙芝居出版協会
    - 3) 北海道教育紙芝居協会（1941.12）
    - 4) 旭川の紙芝居運動—その後
- おわりに—北海道地域調査から紙芝居研究にどのような論点が提起できるか？
- 1) 生活綴方運動の展開と弾圧・「屈折」
  - 2) 地域文化状況と紙芝居
  - 3) 具体的作品（現地刊行）と日本教育紙芝居協会作品（北海道を扱ったもの）との往還関係
  - 4) 戦時アイヌ社会史

谷咲子さんの報告に対するコメントや坂本紀子さんの研究報告によって、これまで課題であったいくつかの問題が深められ、意義のある研究会となった。具体的には、①開拓地やいわゆる「へき地」が多いという北海道地域の特徴から問題を考えなくてはならないこと、②坂本亮（磯穂、亮人）や土橋明次、石附忠平、森善次などのキーパーソンとなる人物が考察すべき対象として改めて指摘されたこと、などである。さらに③として、北海道紙芝居のテーマ性については、戦時期の「北海道文化」論との関連が問題となる。また教育における「北海道」性の称揚などとも関連させつつ、作品それ自体と戦時期北海道翼賛文化論とを相互参照しながら分析することが課題となるだろう<sup>\*12</sup>。



遺愛幼稚園所蔵紙芝居目録 2019.8 撮影分			
	赤い花ト青イ海	日本教育紙芝居協会	1940年10月5日
	アシノクキ (蘆の茎)	日本教育紙芝居協会	1940年10月5日
	カラダヲツヨク	日本教育紙芝居協会	1940年10月5日
	トホメガネ	日本教育紙芝居協会	1940年10月5日
	蛸八漫遊記 童謡物語	教育紙芝居出版協会 (札幌)	1941年8月10日
新規発掘	サルカニ合戦	教育紙芝居出版協会 (札幌)	1941年8月10日
	ヒヨコノトモダチ ダレトダレ	日本教育画劇株式会社	[1941年9月30日]
新規発掘	花咲翁 童謡物語	日本教育活動画劇出版協会	1941年11月5日
新規発掘	桃太郎	日本教育活動画劇出版協会	1942年4月5日
新規発掘	大東亜を支ふる者	日本教育活動画劇出版協会	1942年4月5日
	モリノエウチエン オペントウ 幼稚園紙芝居第24輯 決戦体制版	全甲社紙芝居刊行会	[1943年10月]
	ヨクバリイヌ 幼稚園紙芝居第26輯	全甲社紙芝居刊行会	[1943年10月30日]
	ベニスズメトウグヒス 幼稚園紙芝居第27輯	全甲社紙芝居刊行会	[1943年10月30日]
	花咲翁	東亜国策画劇株式会社	1944年7月15日
	胡桃割人形 クレールの夢	大東亜文化画劇社	1944年10月21日
北海道立文学館所蔵紙芝居目録 2019.8 撮影分			
新規発掘	太郎とりす	教育紙芝居出版協会 (札幌)	1941年2月25日
新規発掘	ゐばりやの象	教育紙芝居出版協会 (札幌)	1941年8月10日
	妻の力	大日本画劇株式会社	1944年4月10日
新規発掘	空の軍神 前編	北海道教育紙芝居協会 (札幌)	1944年9月14日
新規発掘	空の軍神 後編	北海道教育紙芝居協会 (札幌)	1944年9月14日
	雛鷺の母	大日本画劇株式会社	1944年11月20日
新規発掘	舌切雀	教育紙芝居出版協会 (札幌)	発行年不明

#### IV. 新しい連携にむけて

今回撮影することができた戦時下の紙芝居は上の表の通りである（他に遺愛幼稚園で1933～36年・今井よね作品、また一部戦後のものも撮影）。遺愛幼稚園では、永井理恵子・前掲書収録目録から抽出した1937～1945年の戦時紙芝居16点（発行年不明のもの2点）につき調査を実施、うち『国策紙芝居からみる日本の戦争』「付録2 戦時下北海道内紙芝居データ」に「初出の戦時下紙芝居」／遺愛幼稚園所蔵として掲載されているもの8点を中心に15点を撮影した（これまで判明しているもので枚数に欠落のあるものも復元できた）。『国策紙芝居からみる日本の戦争』刊行後の調査で他館所蔵が判明したものもあり、2019年8月時点での「新規発掘」を表に記した。

また、北海道立文学館においては前掲「戦時下北海道内紙芝居データ」にある6点にくわえ、「雛鷺の母」1点を撮影した。2017年1月、筆者調査のうちに撮影しているものもあるが、あらためて撮影した。

北海道は広がった。生活綴方運動との関係など教育紙芝居運動の概要は次第に明らかになってきた。しかし、小樽や旭川の地域史（教育のみならず文化運動や軍都であることの特徴）、翼賛紙芝居（現物未発見）、アイヌ社会史と紙芝居、何よりも具体的な作品分析と実践運動の相互関係（子どもの受容過程もふくむ）といった未解明・未検討の課題が多い。

本研究グループでも引き続き小川正人さん、坂本紀子さん、谷暎子さん、北海道博物館・道立文学館との連携を強めていきたいと考えている。

ようやく？ 夏の北海道らしいさわやかな陽気となった新千歳を新しい研究構想への期待をのせて飛行機は飛び立ったのである。

#### 【注】

- \*1 児玉満「遺愛幼稚園創立のころ」。
- \*2 永井理恵子「遺愛幼稚園所蔵の史料群について」2010年11月。
- \*3 最近のものとして鈴江英一「札幌キリスト教史の研究」北海道出版企画センター、2019年。また末見だが新井浩文・鈴江英一・山口陽一「教会アーカイブズ入門——記録の保存と教会史編纂の手引き」いのちのこことば社、2010年。紙芝居・保育事業に大きく関係した教会史料調査の参考になるだろう。
- \*4 とりあえず「函館の貴重児童雑誌付録の公開」実行委員会編「子どもたちの夢・あこがれの玉手箱——函館市立中央図書館所蔵 児童雑誌付録展図録」同会、2012年11月。  
また戦時期の幼稚園・保育事業の社会史については本研究グループでは川崎大治の実践に注目が集まり始めているが、上笠一郎・山崎朋子『日本の幼稚園』理論社、1965年といった古典的作品の再読や松本園子『昭和戦中期の保育問題研究会』新読書社、2003年など最新の成果を整理するという課題が残っている。
- \*5 拙稿「『国策紙芝居』——北海道（札幌・京極町）調査報告」『非文字資料研究センター News-Letter』No.38、2017年9月。
- \*6 最近の紙芝居所蔵状況報告としては谷暎子「オホーツクミュージアムえさし所蔵の紙芝居——戦時下紙芝居と戦後GHQ検閲期の紙芝居」、同「釧路・大成寺所蔵の紙芝居」、ともに『ヘカッチ』第14号、2019年6月。
- \*7 同展示会と連動した作品として中川成実・村田裕和編『革命芸術プロレタリア文化運動』森話社、2019年がある。また基本的な史料集として資料研究会編『昭和戦前期プロレタリア文化運動資料集 [DVD版]』丸善雄松堂、2017年がある。
- \*8 北海道博物館資料収蔵番号064731-000000。天塩郡豊富町所在日曹天塩炭鉱からの寄贈史料。
- \*9 脚本審査は大日本産業報国会札幌地方鉱山部会ならびに共和会で審

- 査し、『北海タイムス』紙上に発表とある。共和会については不明。
- \*10 「責任」小島鐵廣原作脚色・加藤春雄画、大日本文化画劇報国社、1941年（通信総合博物館所蔵）。現物は未発見であるが札幌教育紙芝居研究会脚本・澤枝重雄絵の「コロボツクル」（翼賞紙芝居第5輯、1941年7月）など。なお中村一枝「史実の時代の要請を探る——吉良平次郎の遭難から」釧路アイヌ文化懇話会『久摺』第7号、1998年11月は「吉良平次郎」の表象を、国定教科書はじめとする各種メディアについて網羅的に検討したもので参考になるが、紙芝居作品については言及がない。
- \*11 北海道綴方教育連盟を主な担い手とする北海道の紙芝居運動については、最低限、①生活綴方作品・文集それ自体の分析、②関係教員の個人史、③北海道地域教育の特徴とそれを教員がどのように主体的に問題として把握していたかという認識構造の問題、④教育科学研究会運動の特徴、⑤1940～1941年の北海道綴方教育連盟事件とその後の転向をふくむ戦時経歴史、といった問題群の解明・整理が課題となる。とりあえず今回の調査・研究会での報告のため参考

- にしたという程度にすぎないが、以下の文献を挙げておく。
- ・平澤是曠『弾圧——北海道綴方教育連盟事件』北海道新聞社、1990年
  - ・『開拓地北海道の子もたちと教師』（清水康幸執筆）民間教育史料研究会／中内敏夫ほか編『教育科学の誕生——教育科学研究会史』大月書店、1997年
  - ・佐藤将寛『三浦綾子最後の小説「銃口」を読む——綴方事件とそのモデルたち』柏倉舎、2006年
  - ・佐竹直子『獄中メモは問う——作文教育が罪にされた時代』北海道新聞社、2014年
- \*12 例えば「北海道開拓精神」論などのイデオロギーがどのように紙芝居作品に表現されているか、といった論点。榎本守恵『北海道開拓精神の形成』雄山閣出版、1976年、最近では田端宏編『街道の日本史2 蝦夷地から北海道へ』吉川弘文館、2004年、12～27頁。

## 北海道の教育紙芝居

坂本 紀子

（北海道教育大学函館校）

2019年8月3日、北海道立文学館において、北海道の紙芝居の歴史を、長年、追究してきた谷暎子さんを迎えて「戦時下日本の大衆メディア」研究会が開かれた。その研究会で「北海道の『教育紙芝居』」と題し、綴方教育に熱心に取り組んだ教師（以下、綴方教師と称する）と紙芝居の関係、および道内における紙芝居関連団体の動向について報告した。その内容を、報告の際には説明不足だった部分も補いながら紹介し、道内における教育紙芝居の歴史をさらに追究するにあたっての今後の課題を整理してみたい。なお、北海道の紙芝居研究は、谷さんの大きな功績の他は未調査・未検討のものが多く、本報告内容も端緒に留まっている。そのため、今後の課題を意識的に多く記述したことをお断りしておきたい。

### 1. 教育紙芝居と綴方教師、新教育運動

1938年に創立された日本教育紙芝居協会が発行した同年10月号の機関誌『教育紙芝居』には、「北海道の教育紙芝居運動は、主として北海道教育綴方聯盟の同人によって支持されてゐる」<sup>1</sup>と、当時の北海道における教育紙芝居の状況について記されている。「北海道教育綴方聯盟」とは、北海道綴方教育聯盟のことで、坂本亮（本名は亀吉であるが「亮人」「磯穂」の異名も使用している）が中心となり、小笠原文次郎、小鮎寛、土橋明次ら綴方教師と共に1935年に設立した教育組織である。日本教育紙芝居協会を設立した松永健哉は、同年、戸塚廉らと北海道・東北を巡回し各地の綴方教師と交流を深

めており<sup>2</sup>、おそらくその際に坂本らとも交流したと推察される。1937年に松永が設立した日本教育紙芝居聯盟の機関誌『教育と紙芝居』には、坂本や土橋の紙芝居の作品が紹介されており<sup>3</sup>、すでに二人は同聯盟の会員になっていたと思われる。道内の坂本ら綴方教師は、何故、紙芝居に傾倒していったのだろうか。

ちなみに、日本教育紙芝居協会は、1942年に北見で紙芝居の講習会を開催している<sup>4</sup>。1944年には、道内の国民学校や師範学校、女学校の児童生徒が作成した紙芝居によって「前線将兵慰問」を実施する打合せを関係者で行い<sup>5</sup>、釧路、帯広、室蘭、函館において講演して大型紙芝居を実演している<sup>6</sup>。また樺太の豊原、留多加、真岡、敷香、大泊などでも講演、実演を行った<sup>7</sup>。

北海道綴方教育聯盟の『同人通信』第5号で坂本は、「綴方内部理論としては上昇出来るだけ上昇し、分化できるだけ分化し」たが、綴方理論は、現在「行き詰ってゐるのは事実である」<sup>8</sup>と記している。「綴方を健康に正當に発展させるためには、もう綴方の内部理論だけではどうにもなるものではない」とも述べている。坂本は綴方教育を、国語教育としての綴方すなわち文学的理論と通底する国語を教える立場から綴方を指導するのではなく、生活教育（生活指導と言い換えてもよい）の一方法として綴方を指導する立場にあることを同通信で記述している。嘗ては子どもたちの生活を何で導くか、その最も強力な指導方法として綴方を選んだが、いまや、綴方という方法そのものをさらに追究しても子どもたちの生